

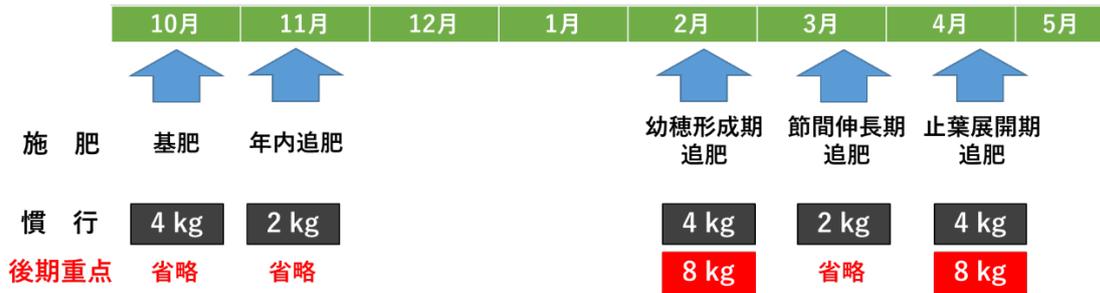
## パン用小麦の後期重点施肥体系

### 1 背景・目的

近年、暖冬傾向であることから小麦の年内の初期生育が過剰になりやすく、穂数過多による倒伏や収量・品質の低下が懸念されている。そこで、パン用途の「ゆきちから」において、初期生育を抑制する「後期重点施肥体系」が生育や収量・品質に及ぼす影響を検討する。

### 2 技術のポイント

- (1) 後期重点施肥体系は基肥を省略でき、年内追肥と節間伸長期追肥を省略するため追肥回数を半減できる(図)。
- (2) 本体系では、茎数と穂数が抑制されることから、一穂粒数と千粒重が向上し、収量が増加する(表)。
- (3) 本体系では、止葉展開期に重点をおいて施肥することで製パン性に関与する子実タンパク含有率を向上できる(表)。



※四角内の数値は10aあたりの窒素量を示す

図 施肥体系

表 生育、収量および品質

試験区	出穂期 月/日	成熟期 月/日	最高分けつ期	穂数	一穂粒数	千粒重	収量	子実 タンパク質
			茎数					
			本/m <sup>2</sup>	本/m <sup>2</sup>	粒/穂	g	kg/10a	%
後期重点施肥	4/30	6/15	490*	503	28.3*	42.9*	601*	13.4*
慣行施肥	4/27	6/12	730	562	24.5	40.8	513	12.3

※\*はt検定により5%水準で有意差があることを示す(慣行施肥との比較)。

### 3 成果の活用と残された問題点

- (1) 後期重点施肥体系では、慣行施肥体系と比較して成熟期がやや遅れることに留意する(表)。
- (2) 後期重点施肥体系では、1回あたりの肥料の施用量が多くなるため、ブロードキャスタ等の機械装備があることが望ましい。
- (3) 年内(10~12月)が低温の年に検証していないため、今後検討する必要がある。

問合せ：作物研究部 作物チーム TEL 076-257-6911  
 担当者：山上 友誠・有手 友嗣・松崎 兼秀